

ポルトガルのアジア進出における女性

1995年4月1日

山田義裕

C. R. ボクサー著「Mary and Misogyny」(1975年)にもとづく。

(Saúl Barataのポルトガル語への翻訳版を使用)

1. ポルトガルのアジアへの移民とスペインのアメリカへの移民における女性の移民の態様の違い

スペインからは、多くの女性が移民したが、ポルトガルからは、アジアへは、基本的に女性の移民はなかった。

スペイン： *王室は、妻の帯同を義務づける法を何度も発布した。

*メキシコの副王は17-18世紀の間、全員が妻を同伴。

ポルトガル： *王室が女性の移民を奨励したことはなかった。

*インドの副王あるいは総督で、1549-1750年の間に、妻を同伴した者は一人もいない。(1750年にタヴォラ公爵夫人が夫への同伴を言い張った時は、リスボンで大センセーション。結局、国王は承認。)

*唯一の例外が、「国王の女孤児」(オルファンス・デル・レイ)
(Orfãos del Rei)

* 両国の政策の違いの理由：

(1) C. R. ボクサーの意見

リスボンからインドまでの航海は約半年か、それ以上かかり、(スペインからアメリカは、ほぼその半分の日程)リスク、コストが、共に高い。妻の渡航コストを個人で負担できる移民はおらず、王室の援助を必要としたが、王室自身が負担に耐えられるような財政状況ではなかった。

(2) その他の考えられる理由

インドは、中継地貿易の基地で、アメリカのような荘園経済(エンコミエンダ)の部分が少ない。ただ、ブラジルは荘園経済(ファゼンダ)が基盤であり、ブラジルにも女性の移民が少なかったことの説明にはならない。

* バックグラウンドの違い

(1) 人口

ポルトガル 1580年： 130万人(アジア、アフリカ、ブラジルを含む、ジョアキン・ヴェリッシモ・セロン、「ポルトガル史」)

カスティーリャ王国 1591年： 590万人(ブローデル、「地中海」)

(2) 移民数

スペイン：(ピーター・ボイド・ボーマン、「16世紀のアメリカにおけるスペイン人、4万人の人口の年代別の地理的分布」)

	男	女
1493-1519年	5,481	308
1520-1539年	13,262	845
1540-1559年	9,044	1,480
1560-1579年	17,587	5,013
1580-1600年	9,508	2,472
計	54,882	10,118

(16.6%)

ポルトガル：ボクサーは、4,000人/年がインドへ渡った、と推定しているが、移民数は明示されていない。500人/年程度ではないか。

(3) 出航数

スペインからアメリカ	
1506-1515年	278隻
1516-1540年	1,513隻
1541-1560年	1,511隻
1561-1580年	1,404隻
1581-1600年	2,093隻

ポルトガルからインド	
1500-1519年	234隻
1520-1539年	156隻
1540-1559年	112隻
1560-1579年	103隻
1580-1599年	100隻

ボクサー「The Portuguese Seaborne
Empire」

ピエール・ショーヌ「Séville et
l'Atlantique」

2. 国王の女孤児

1545年に第1回の派遣が行われ、1595年に一時的に中断されたのを除いて、18世紀まで続けられた制度。

「白人の人口を増やす」目的で、ポルトガル国内(主に、リスボン、ポルト)の孤児院から結婚適齢期の娘を、毎年5-15人程度を選んで、インドに派遣した。

派遣の費用および、彼女達が結婚する際の持参金を、ポルトガル王室が負担したので、「国王の女孤児」と呼ばれた。

制度ができた当初は、彼女達はゴアに到着すると、結婚するまでの間、身元の確かな家に預けられた。

1598年に、ノッサ・セニョーラ・ダ・セッラ収容所が設立されると、結婚するまでここに収容されるようになった。ここでの国王の女孤児の枠は、20名とされた。持参金は、夫に役人のポストを与えるか、荘園を与えるか(普通は数ヘクタール)であった。ただ、後に結婚相手がなかなか見つからないようになると、金銭での持参金が加算された。

3. ゴアにおける身寄りのない女性の収容施設

イスラム教徒、インド人、オランダ人との永続的な戦争、熱帯の疾病、放埒な性生活によって、インドにおけるポルトガル人男性の死亡率はきわめて高かった。

その寡婦や孤児の収容所が不足した。

1610年に、サンタ・マリア・マダレーナ収容所が設立された。ここも、当初は白人女性専用を主旨としたが、実際には大半が白人とアジア人との混血児が収容された。白人の良家の嫡出子であることが入所の条件であった。次第に守られなくなっていく。この二つの施設は、慈善病院（サンタ・カサ・デ・ミゼリコルディア）と王室からの財政支援と、信者の遺産贈与によって運営されたが、王室は国王の女孤児分だけ（20人分）を負担していた。17世紀中頃に、ノッサ・セニョーラ・ダ・セッラ収容所の収容者は200人（国王の女孤児20人をふくむ）。サンタ・マリア・マダレーナ収容所の収容者は60人であった。

17世紀初頭にサンタ・モニカ修道女院が設立されたが、入院には持参金を払わなければならなかった。ゴアの良家では娘をここに修道女見習いに出すことが、一種のステータスシンボルでもあった。

4. ポルトガル人のゴアにおける退廃した生活

インドのポルトガル人は、多くの男女の奴隷を使用した豪華な生活を送っていたが、その様子は多くの当時の旅行記に描かれている：

＊リンスホーテン（オランダ人）、「東方案内記」（岩波、大航海時代叢書）

＊カルレッティ（イタリア人）、「商人カルレッティ」（榎 一雄、大東名著選）
独身男性（「兵士」と通称された）がハーレムを営み、女奴隷達に、菓子、衣類等を作って、売らせていた様が述べられている。彼らは、結婚よりも、こうした安逸な生活の方を好んだ。また、結婚していても性的に放埒な生活は変わらなかったようで、多くのイエズス会士が、これを嘆いている。

ただ、女性の評判も良いわけではなく、これまた、多くの旅行記で、不道德が報告されている。

ゴアにおける日本人の奴隷の数は多く、ポルトガル人の数よりも多いという報告もある。（井沢 実「大航海時代文献解題」《岩波、大航海時代叢書》）

5. プロヴィンシア・デ・ノルテの荘園

ポルトガルのインド経営は、貿易によるものであり、荘園はあまり発達しなかったが、シャウルーからダマアーンにいたる海岸沿いの「北方県」（プロヴィンシア・デ・ノルテ）はその例外であった。一つの村の形態をなしており、国王の女孤児の持参金とされることも多かった。その相続は、三代におよぶことが認められた。相続が、女性にされる場合は、「ポルトガルで生まれたポルトガル人と結婚すること」が条件とされた。これに対して、現地では不満が出た。貿易が衰退し、これらの荘園の重要性が増すと、高級役人達が結婚によって、これらを手にいれようとしたため、王室はしばしばその禁止令を出した。

6. アフリカのザンベジの「ブラッゾ」

ポルトガル人が、ザンベジに進出した時、バンツ族の酋長たちから得た土地で作った莊園を「ブラッゾ」(prazo)と呼んだ。最初は、酋長達に永代借地料を払ったが、後にポルトガル王室に支払った。広大な土地で、黒人奴隷を訓練した私兵を有し、ブラッゾの領主同士で戦う時には、数千人(時には2万5千人)もの兵を集めた。三代の世襲が認められたが、バンツ族の酋長の娘と結婚したりして、2、3代と世代が進むうちに、白人の血は薄まった。女性への世襲も認められていたが、白人ポルトガル人と結婚しなければならなかった。流罪人が、少ない白人男性の供給源であった。そこで、ゴアの商人達が住み着くようになり、純粋なインド人も多く移住してきた。18世紀の中頃に、インド人のザンベジでの居住制限が撤廃され、同世紀の終わり頃には、ザンベジの支配的なグループとなった。

7. マカオのムイツアイ(契約女中)

マカオ市は、1555年頃に創立されたが、創立当初は近辺の中国人女性と接触することはなく、連れてきた日本人女性、マレーシア人女性、インドネシア人女性、インド人女性(ほとんどが奴隷)と共に暮らしていた。市が繁栄するに従って、中国人の住民が流れ込んで来るようになると、ポルトガル人は中国人女性の妻を求めた。国王の女孤児は、極東のマカオまでは来なかった。英国の旅行家、ピーター・ムンディは1637年に書いた本の中で、「この市には、ポルトガル生まれの女性はい人しかいないと言う。ポルトガル人の妻は、中国人女性か、ポルトガル人男性と結婚した中国人女性の娘である。」と述べている。

両親が、長期(普通は40年)または終生の契約で売った娘達で、ムイツアイ(MUI-TSAI)とよばれた。中国当局は何度もこの人身売買を禁止したがあまり効果はなかった。奴隷に等しい地位であったが、実の娘のように育てられ、ポルトガル人の妻になり、遺産相続を受け取る者も多かった。遺産相続には、普通は次のような条件が付された。

- *遺産の贈与人の家族の誰かに一定期間の奉公を続ける。

- *洗礼を受ける。

- *キリスト教徒と結婚すること。

ルイサ・ロバートという寡婦はマダレーナという日本人の女奴隷を解放して、彼女に遺産を残したが、その条件は「彼女が結婚するまでは、私の名付け親であるフェルナン・デ・パリヤーレスの家で育てられること。もし、彼女の素行が悪かったり、この家を出ることがあったら、10パルデオン・デ・レアーレス(ポルトガル領インドの古い通貨)は、これを受け取ることはできず、慈善病院に渡されることとする」

マカオの修道女院

1633年に、クララ派の修道院が設立された。マカオの上院が援助をしており、そのために、市に持ち込まれる重要財貨(白檀、フカ鰭、木綿、粗布、等)に対して、1パーセントの追加税を課した。定員は30名。

8. マニラにおけるスペイン人

16世紀末のフィリピンにおけるスペイン人の人口（岩波、モルガ）

1587年：800人；フィリピン全土

1591年：300人；マニラ市

1604年：1,200人；フィリピン全土

（上記の数には、教会関係者、兵士、官吏を含まない）

ポルトガル人とは違い、妻子を帯同していたので、多くのスペイン人女性が住んでいた。

これらの女性（白人、混血児）の生活の安定のために、多くの施設があった。

* コレヒオ・デ・サンタ・ポテンシアーナ

1594年創立の最も古い女性の収容施設で、王室からの支出と、所領（エンコミエンダ）からの収入によって、経営されていた。収容人員は約60人。

収容者のカテゴリー：（1）征服者の娘で、両親の死によって、資力なく残された者（2）スペイン人とフィリピン女性間の私生児（最も数が多かった）、（3）既婚女性で夫婦喧嘩をしている者の一時的な避難所、（4）貧しいが、身分のある女性。

また、17世紀末にここを訪れたジェメリ・カレリは公娼制度が存在し、その女性達も受け入れられていた、と書いている。

* コレヒオ・デ・サンタ・イサベル

慈善病院の付属施設として1632年に創立された。裕福な財源を持ち、市の有力者達が、娘を教育のためにここに入れ、適齢期になると結婚させるか、そうでない場合は、サンタ・クララ修道院の修道女とした。

9. 参考図書

- （1）C. R. ボクサー著「聖母マリアと女嫌い」（1975年）（Saúl Barataのポルトガル語への翻訳版「女性とイベリア半島諸国の海外進出」）
- （2）モルガ著「フィリピン諸島誌」（1609年）（岩波）
- （3）ホセ・ルイス・マルティーネス著「西インド諸島への旅客達」（16世紀における大西洋の航海）（1983年）
- （4）フランチェスコ・カルレッティ著「世界周遊記」（榎 一雄訳、1984年）
- （5）C. R. ボクサー著「ポルトガル海上帝国」（The Portuguese Seaborne Empire）（1969年）（Inês Silva Duarteのポルトガル語への翻訳版）
- （6）P. ショヌー著「セヴィリアとアメリカ」（1977年）（Janine Garciaのスペイン語への翻訳版）

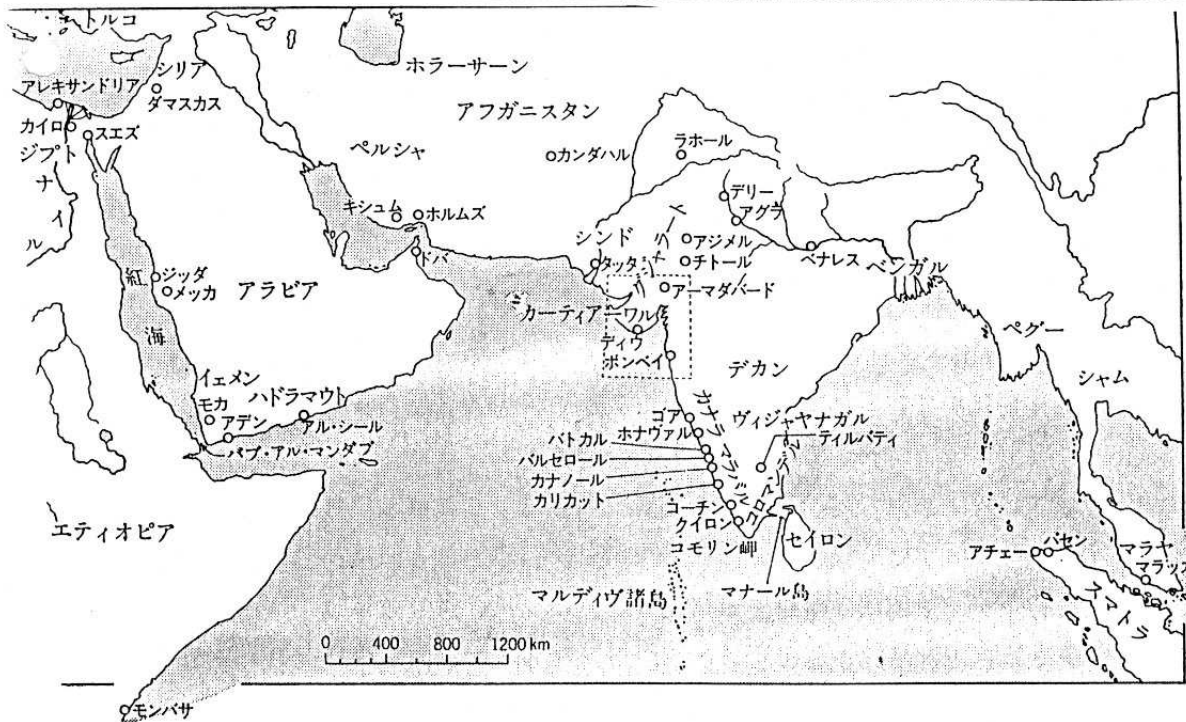
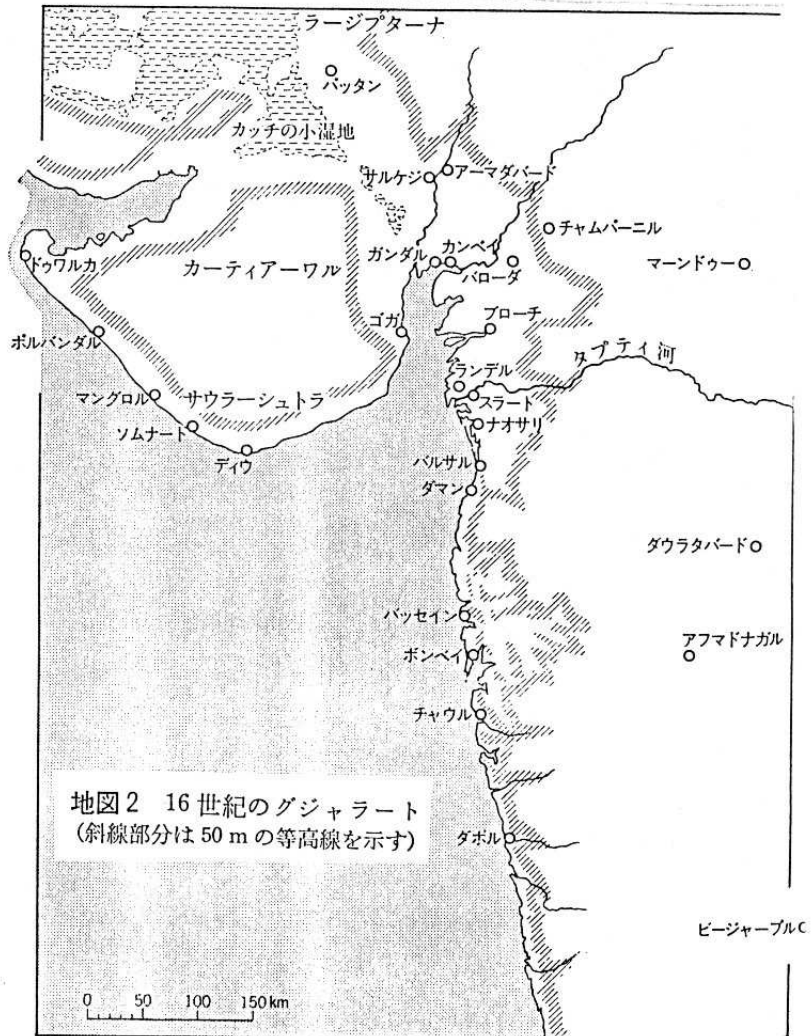
M.N.ピアス著

生田 滋 訳

「ポルトガルとインド」

→ 中世グジャラートの商人
と支配者 -

(岩波現代選書)より



地図1 16世紀のアジア(中央部の点線で囲った部分は、33ページの地図2を参照)